

報 告 タ イ ト ル	唐代寺院調査報告 ―日本文化との関連を中心に―
報告者所属名	日本文学研究専攻(国文学研究資料館)
報 告 者 氏 名	七田麻美子
調査調査対象 藍田県 悟真寺、西安市 青龍寺・大雁塔・大興善寺、周至県 仙遊寺、戸県 草堂寺、長安県 華嚴寺・興教寺・香積寺、福州市 開元寺・湧泉寺、広州市 六容寺・光孝寺 ○調査概要 上記の寺院はそのほとんどが唐代に創立された寺院であり、唐代からの建築物、文物の類を残すものも多い。今回の調査の目的はこうした仏教寺院そのもの、そしてそこに残された文物の調査にある。ただし実際にはいわば目玉的な存在があった。悟真寺である。悟真寺は以前より、軍事特別地域に指定されており、外国人には開放されていない寺院である。また終南山の連峰の中に位置することから参拝の難しい位置にあるため、中国人の訪れも稀といってよい。そうした厳しい位置に存在する現在の悟真寺は、修行道場として、住職一人が守る至極小さな寺院である。だが一般にここは、中国浄土教大成者善導の覚悟の地とされ、浄土教、浄土宗において重要な意味を持つところとされている。 このことに関して、かつてより大きな疑義が提出されている。善導および浄土教をこの悟真寺に結びつけるのは後世の創作であるということである。さらにそれが日本で定説化した過程に、浄土宗の祖法然や、浄土宗教義大成者良忠の存在があることが確認でき、日本仏教史研究の上で看過できない問題点になっている。今回は、このように多くの興味深い問題を抱えながら、研究者が行くことができなかった寺院の調査を主たる目的とした。 また今ひとつの目的として、空海関連寺院の調査も行った。 現在中国仏教界には変化が見られる。それは、中国の政治体制の変化に大きな要因があることである。一つには、経済政策の変更により、貧富の格差が広まる中、貧困層を中心とした熱心な仏教との増加があるということ。もう一つには、国家の観光政策の中で寺院などの歴史的建造物をそこに取り込もうとすることである。 かつての長安であった西安市には、多くの寺院が残されているが、その多くが文革による壊滅的なダメージを受けた。現在そのダメージからの復興をとげつつあるが、それを支えるのが上記の二点である。このような状況下で空海関連寺院はまた特異な変貌を見せる。特に寺院の観光地化を図るとき、空海関連寺院は日本からの観光客に対して大きなアピールポイントを持つのは言うまでもない。これらの現状を調査するとともに、観光地的な変化の中では古体を保存する動きがないという事情を鑑み、変容を遂げる前に唐代文物を調査しようとする目論見もあった。 ○調査成果 今回の調査では、まず悟真寺の調査がかなったことが何よりの収穫である。紙幅の都合もあるので、以下にその点について述べる。 悟真寺に関する問題は、悟真寺で覚悟したとされる善導伝の問題でもある。悟真寺と善導が結びつけられたのは死去四百年後の往生伝による。一般に伝説的な話とされるべきことが、定説化していったことについて、中国国内での事に関しては現在まだ確認できないが、日本においての定説化には浄土宗宗祖らによる認定があり、教義を広める中で終南山と浄土教を結びつける逸話を欲したという状況を読み取ることができる。つまり、悟真寺はその本体そのものより、逸話の中での存在こそが価値を持つところであったというえよう。 今回の調査の中で、悟真寺において、多くの善導伝説の痕跡があることが確認できた。寺院といっても山間の修行場という風情の場であるから、本堂以外の部分には人工的な建造物はほとんどない。そうした中に、善導修行の洞穴、善導座禅の岩、善導のこもった森などが存在する。これらは当地の住職によって案内された場所である。こうした話がいつから伝わっていたのかなどのことは不明ということであった。 中国の仏教研究においては、浄土教と悟真寺の結びつきについての疑義は実は確認されていない。日本においては、法然の教義研究などの成果により、善導伝の研究が進展したという事情がある。この成果のすりあわせをするためにも、悟真寺の調査が必要だというのは予めから言われていたことであり、今回ようやくその端緒についたところである。	